白鷗大学論集　第16巻　第１号

資料

「プルス・ウルトラ」はどこから来たのか

髙　橋　節　子

Where does “PLUS ULTRA” come from?

Setsuko TAKAHASHI

髙　橋　節　子

1.「プルス・ウルトラ」はどこから来たのか

「プルス・ウルトラ」は、本学の創立者である上岡一嘉元学長が第一回卒業式で引用されたことばで、本学が「永久に新しく、永久に若い情熱の学府」たることを目指した基本理念として象徴的な意味を持っている。しかし、このことばがどこから来たのかについては学内でもあまり知られていないようである。

このことばはスペイン語の辞書にも載っているので、スペイン語と誤解されている方もいるかもしれないが、本来はラテン語とされている。「プルス」は「さらに」とか「もっと」という意味、「ウルトラ」は「遙か彼方に」とか「向こう側に」といった意味であり、従って、「プルス・ウルトラ」は「もっと向こうへ」「さらに彼方へ」といった意味になる。

このことばは確かにスペイン語ではないが、実はスペインと深い関わりを持っている。

2. カール5世と「プルス・ウルトラ」

憲法で定められたスペイン国旗は赤・黄・赤の三本の水平線である。しかし、国外で使用される場合や公用・軍用の建物、軍用船舶に使用される旗は中央やや左よりに紋章が入ったものとなっている。

この紋章はかなり凝ったデザインで、中央にイベリア半島の4つの王国を象徴する紋章が組み合わされ、その中にブルボン王家の文様、下部にざくろ（グラナダ）、上部に王冠、さらに紋章の左右には、赤い帯が巻き付いている2本の柱が立っている。通常、本に印刷された程度の大きさでは、赤い布らしきものが柱に巻き付いていることまではなんとか気づいても、そこに文字が書かれていることはほとんど分からない。まして、なんと書いてあるかなどは。実はこの柱に巻き付いた赤い帯には、左の帯に「PLVS」右の帯に「VLTRA」[1]と書かれているのである。

二本の柱とそれに巻きつく赤い帯に浮かび上がる銘「プルス・ウルトラ」、この紋章は実はスペイン国王カルロス1世（神聖ローマ帝国皇帝カール5

世）の紋章に現れたものであった。カルロス１世はコロンブスがアメリカ大陸に到達した８年後の1500年に生まれ、ヨーロッパやアメリカに広大な領土を有する世界一の強国の王となる。その彼の野望を表すにふわさしい銘といえるであろう。

帯が巻き付いている二本の柱の方は「ヘラクレスの柱」—今のジブラルタル海峡—を表している。ギリシア神話の英雄ヘラクレスが成し遂げた12の難行のうち、10番目の難題にゲーリュオン[2]が所有する牛を盗んで連れ帰るということがある。ヘラクレスはこの偉業も成し遂げるのだが、途中ジブラルタル海峡を渡る際、ヨーロッパ側とアフリカ側に、向かい合って立つ二本の柱を立てたという。また、異説によると、大陸に囲まれ閉ざされていた地中海から西の大きな海の方に出るために、岩山を引き裂いて両側に置きジブラルタル海峡を作ったのだとも伝えられている。これが「ヘラクレスの柱」の由来で、ジブラルタル海峡の別名、ヨーロッパの西の最果てを意味していた。[3]

実際、ジブラルタル海峡の一番狭いところは15キロしかなく、そのうえ時速３キロの西から東へ流れる潮があったから、いにしえの船乗りたちがここを通り抜けるのも容易ではなかったはずである。また、かつてはこの先は魔界であり、海は滝のようになって奈落に落ちているという伝説もあった。[4]

ヘラクレスが二本の柱を建てたときに、ここが地の果てであったので、「Non Plus Ultra（これより先何もなし）」、あるいは、「Ne Plus Ultra（ここから先に進むべからず）」という碑文を記したとされている。大航海時代が始まり、多くの船乗り達が太西洋に乗り出すようになって、この碑文は修正を余儀なくされる。「Non (Ne) Plus Ultra」から「Plus Ultra」へ。カール５世が紋章に採用したのはこのNon (Ne) を取り去ったモットーだった、というのが一般的な解釈となっている。

しかし、それならば「Non (Ne) Plus Ultra」ということばが文献の資料の中に現れていなければならないのだが、実はカール５世が「プルス・ウ

ルトラ」を採用した1516年より以前の文献に同じことばが見つかっていない。このあたりの事情は稲本（1992）に詳しいが、結論から言うと、「プルス・ウルトラ」は実はラテン語の文献から取られたものではなく、もともとはフランス語（Plus Outre）であったということである。(Plus Oultreという綴り字の異なるバリアントもある。)カール五世は生まれも育ちもフランドルで、1517年に初めてスペインに来たときの帆船に翻っていた表記も「Plus Oultre」であった。これがスペインの貴族たちの愛国心とプライドを傷つけ、それを悟ったカール5世はフランス語のモットーを文法を無視してまでラテン語に改め、それが後に、ヘラクレスの柱の意匠と相まって、<さらに彼方へ>という帝国主義的野望を示すものへと再解釈されていくことになった、と稲本は述べている。[5]

ただ、上岡一嘉元学長が「プルス・ウルトラ」を引用したのは、その出自がフランス語であったということを知ってのこととは思えないので、白鷗のスローガンを考えるときには、ごく一般的な解釈に従い、大航海時代になってそれまでの「Non Plus Ultra」（あるいは「Ne Plus Ultra」）から、限界を打ち破りさらに遠くを目指す「Plus Ultra」へ変化したもの、と考えておけば充分であろう。

3.「プルス・ウルトラ」の再解釈

この精神は例えば、1991年3月の第一回卒業式の式辞で、上岡学長の次のようなことばとして現れている。

「・・・諸君は国際人として、世界を舞台に『さらに向こうへ』と挑戦を続けることはもちろんでありますが、自分の内面世界においても、プルス・ウルトラの精神でいて欲しいと思うのです。」「(プルス・ウルトラは)現状に満足することなく、苦難を開拓した、かつてのスパニッシュ・スピリットの象徴とも言えるでしょう。新しい世界への拡大、発展を目指して限界を作らずに、果敢に挑戦をしていく。限界をいうものは自ら作ってしまっていることが多いものなのです。」[6]

また、「白鷗」大学という名前のルーツはリチャード・バック著の『カモメのジョナサン』にあり、ジョナサンの「より遠く、より高く、より速く飛ぶ」ことに命をかける姿勢に共鳴したからだということである。[7]

つまり、「プルス・ウルトラ」は自分自身に限界（「ネ・プルス・ウルトラ」）を作ることなく、それを乗り越えて新しい地平を開拓していく姿を象徴するものとして用いられたと考えられる。

本稿は「プルス・ウルトラ」がどこから来たのかを述べるのが目的であり、その精神に検討を加えることが目的ではないので、詳しくは述べないが、ただ、私見では、限界を設けず「さらにかなた」を目指す時代は過去のものになりつつあるような気がする。「さらにかなた」を求める姿勢には原理的に際限がない。大航海時代から今日まで「もっと、もっと」を求め続けたライフスタイルは、今、大きな壁――環境問題、人口問題、資源の枯渇、等――にぶつかっている、という正慶隆の主張は正鵠を射ているように思われる。[8]この辺の事情を正慶は「プルス・ウルトラから再びノン・プルス・ウルトラへ」「もっともっとはもういらない」というスローガンに込めている。

かもめのジョナサンにたとえて言うならば、「より遠く、より高く、より速く飛ぶ」ことを追い求める生き方の他に、距離・高さ・スピードは現状のままであっても、例えば「より美しく飛ぶ」方法を追い求める生き方もあるのではないか。

先頃提出された「自己点検・評価報告書（2001年度）」の中で上岡條二副学長は「本学のこれからのあり方は、量的な拡大よりも、質的な充実を図っていくことであ」る、と述べている。また、これに先だって昨年12月に開かれた将来構想懇談会でも、「最大ではなく最良の大学をめざす」との発言があった。最良という最上級は当然「～の中で」という限定の中で初めて意味を持つわけで、ここで述べられているのは、一定の限界の中での最良を目指す、ということであろう。

限界を超えての量的拡大から、限界の中での質の追求へ。カール５世の

「プルス・ウルトラ」のスローガンが再解釈を余儀なくされたように、新世紀を迎えて白鷗の「プルス・ウルトラ」精神も再解釈を迫られているような気がするのである。

注

1　ラテン語のvはuを表す。
2　三つの体を持ち、スペインの西の沖合あたりに位置する架空の島に住むとされる。
3　佐藤快和（2000)、362ページ
4　同上、365ページ
5　稲本健二（1992)、160ページ
6　上岡一嘉・柳川高行、2001年、390ページ
7　同上、400～401ページ
8　正慶隆（1998)、246ページ

参考文献

稲本健二（1992)、「大航海時代の意匠」『ユリイカ』３月号、154～168ページ
上岡一嘉・柳川高行　(2001)、「白鷗大学経営学部の建学の精神―上岡イズムとプルス・ウルトラ―（その１）」『白鷗大学論集』第15巻、第２号、377～435ページ
佐藤快和（2000)、『海と船と人の博物誌百科』原書房
正慶隆(1998)、「欲望と発展のルール」『情報文化の学校』NTT出版、234～247ページ

（本学経営学部教授）